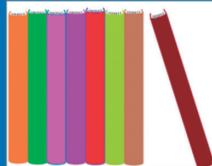


# 大人が絵本を 第92回 絵本はいのり。



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*

小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー BibliOキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事/ファウンダー

## 『地雷ではなく花をください』

2022年2月24日、歴史に刻み付けてはならない戦争が現実となりました。ロシアのウクライナ侵攻です。武力攻撃を始めると、原子力発電所区域を砲撃し、3月には官公庁、病院、住宅地、あげくは避難所や学校にまで爆撃、4月に入ると一般市民を無差別に虐殺し全身が凍てつきました。

ロシアの大統領とその周りを囲む要職者らの狂氣的な、想像力のない行為に憤りと虚しさを感じているのは、みな同じでしょう。人間の敵は新型コロナウイルスであって、人間ではありません。武力で、砲弾で解決できることなどないはずですが。

1996年に発行された『サニーのおねがい 地雷ではなく花をください』は、戦争が終わって平和な世界になっても、半永久的に被害をもたらす非人道的な武器をなくし、真の意味で平和な世界をめざそうと訴える絵本です。柳瀬房子氏の語りかけてくることばに、葉 祥明氏が温かい絵で平和のメッセージを伝える絵本は、全国の小学校・中学校・高校の図書室に置かれ、平和学習の教材となっています。

『サニーのおねがい  
地雷ではなく花をください』  
柳瀬房子 作 葉 祥明 絵  
(自由国民社)



絵本の表紙をよくご覧ください。スカイブルーの空の下、大地に咲く黄色い花の画は、ウクライナの国旗カラーなのです。今、この絵本が平和を強く訴えてくるのです。ロシア軍にお願いします。「砲弾ではなく花を、絵本をあげてください」。そして、大人が

絵本を読んで、人間の心を回復させてほしいと切に願います。



## 時代に翻弄されたロシアの絵本文化

ロシアで絵本文化が広く普及し、飛躍発達を見せたのは1917年の社会主義革命以後のことです。19世紀までは社会経済的な立ち遅れから、人口の大部分を非識字層が占めていたところ、革命後にロシアの近代化と社会主義化を急ぐ新政権が目にしたのは児童書でした。民衆が挿絵を頼りに親子で文字を学ぶことを可能にする絵本は、識字率向上の効果的手段となり、19世紀末に30%未満だったロシア国内の識字率は、1920年代に60%、30年代末には90%近くまで上昇するのです<sup>1)</sup>。

1920年代半ばには本格的に絵本の出版に着手し、ロシア革命以後、絵本の黄金時代が訪れるのです。しかし、スターリン独裁体制の下、それはわずか10余年で終焉を迎えます。その後もペレストロイカ政策やソビエト連邦の崩壊など、国家や民族の狭間で教育・文化も大きく揺れ動いてきました。その結果、ソ連崩壊後は、良質な絵本を作成・供給する力をもてず、絵本出版の質を急激に低下させてしまうのです。その手立てとされたのは、著作権の制約を受けない民話絵本や、欧米の安手絵本を真似たものを出版することで、それら絵本が突出することになりました<sup>1)</sup>。

その時代に生まれたのが、日本でもっとも馴染みのあるアレクセイ・ニコラエヴィッチ・トルストイ再話の『おおきなかぶ』なのです。ロシア民話『かぶ』の編集・再話者が複数存在することは、本連載90回で紹介したとおりです。

『かぶ』がロシア国内で広まったのは、優れた再話

# 手にするときは！

## 絵本作家のねがい

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

が出版されたことによると分析されています。『かぶ』を最初に編纂したのはアレクサンドル・アフナーシェフで、1863年刊行の『ロシア民話集』に、挿絵のない原話として登場するのです<sup>2)</sup>。原話とは、人々の間に口伝えで広がった、文字にされていない昔話を聞き取り、初めて文字にされた段階のものをいいます。

原話を体裁よく整えて文章にしたものが再話です。トルストイ再話の『おおきなかぶ』が出版されたのは1940年、つまりスターリン体制期の、創作活動を統制されていた時代です。ソ連時代に定番だった『かぶ』は、トルストイ版なのです。

### 絵本の世界では、仲間なんですよ！

ロシアに侵攻されたウクライナも、国家や民族の狭間でロシア以上に翻弄されてきた国です。1917年の社会主義革命によって、およそ70年間をロシア、グルジア、カザフスタンなど他の連邦構成共和国とともに、ソビエト社会主義共和国連邦として巨大な多民族複合国家を形成していました。

そんなウクライナにも、古来より伝わる昔話があります。日本では『おおきなかぶ』と並んで、幼稚園などでよく劇にされている『てぶくろ』です。



『てぶくろ』  
エウゲーニー・M・ラチョフ 絵  
内田莉莎子 訳  
(福音館書店)



『てぶくろ』が出版された1950年は、ロシアの絵本黄金期が終わったのちの第二次世界大戦後に、戦中にくらぶとヒト・モノ両面での莫大な損失に加え、再

び政治体制の引き締めへ転じたときです。その政権下で激化した形式主義批判の嵐が、ソビエト連邦で絵本文化の再興を遅らせていた時期に当たります<sup>3)</sup>。

『おおきなかぶ』と『てぶくろ』は同じ時代に出版され、時代の荒波に飲まれながらも激動する社会の中で読み継がれてきた2冊の絵本というわけです。



### 『てぶくろ』は大人向け文学だったのです

日本でも長く読み継がれている『てぶくろ』は、1950年に出版された、エウゲーニー・M・ラチョフ絵によるものです。1949年から水彩画を使い始めたラチョフの、最初のカラー作品が『てぶくろ』なのです。

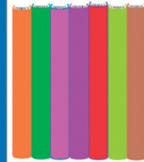
日本でもっとも馴染みのある『おおきなかぶ』はトルストイの再話ですが、現在まで読み継がれている『てぶくろ』は原話です。原石の民話を、時代も国境も超えて私たちは楽しめているのです。しかも、元々は子どものために作られたのではなく、大人対象の口承文学だったものが、今では、子どもが現実と非現実の境界で没頭できる身近なお話なのです。

ロシアの児童文学研究団体「カスチョールの会」の田中友子氏は、同会誌「カスチョール」で「この作品が数ある児童書の中で光り輝いているのは、ひとえに1940年代末にこの話をウクライナ語からロシア語に訳したブラギーニナの力によるものだろう」と述べています<sup>3)</sup>。子どもの感覚を非常によく理解していたロシアの詩人ブラギーニナの言語感覚、表現力によって現代まで長く読み継がれ、そして後世へと読み継がれていくウクライナの民話なのです。



### ロシアもウクライナも大事にした画家

エウゲーニー・M・ラチョフは1906年にロシア



で生まれ、第一次世界大戦、第二次ロシア革命、第二次世界大戦、少数民族強制移住といった歴史の渦中を生きました。動物を擬人化しながらも、本来もつ野性味や骨格などのリアリティを残して衣服を着せることで人間くささを表現する、ロシアを代表する動物挿絵の画家です。

田中友子氏は前掲「カスチョール」で、ラチョフについて大変興味深いことを述べています。

ラチョフは、大道芸、ルポーク(ロシアの民衆版画)、民芸品サーカスなどに登場する服を着た動物がとても滑稽で人間に似ているのを思い出し、服を着せることを思いついた。一言で服といっても、民族や階級、職業など様々なものを表す。ロシアの昔話にでてくる動物にはロシアの、ウクライナ昔話にでてくる動物にはウクライナの民族衣装を着せることで、それぞれの話の民族色を大事にした<sup>3)</sup>。

『てぶくろ』に登場するネズミやカエル、キツネが着ている独特な服は、ウクライナの民族衣装なのです。日本の昔話を読んで、日本古来の文化を理解するように、外国の昔話を読むとそれぞれの国の文化や歴史背景を知ることにもつながるのです。

ウクライナの民族衣装をまとった大小さまざまな動物たちが、暖を求めてひとつの手袋の中に譲り合いながらぎゅうぎゅうと入り込む『てぶくろ』は、戦争の時代を生きてきた画家の、平和への祈りと願いのようです。ロシアで生まれて、ロシアとウクライナそれぞれの国の文化や民族性を尊重しつつ昔話を描いたラチョフの叫びが、作品を追究すればするほどに聞こえてくるのです。



### 検閲が厳しい時代を想像してみよう

動物挿絵画家として名高いラチョフですが、『てぶくろ』ではじめて動物たちに服を着せたとき、出版者

が困惑したという逸話を残しています。体制批判と受け取られることを恐れて、服を着ていない動物を描くように説得するのですが、ラチョフが聞き入れなかったため、出版するかどうかで7か月も迷った末、あらゆる機関の官僚と芸術家たちとの長い協議によってやっと出版が決まったというものです<sup>3)</sup>。

それは、スターリンの死よりも5年前のことで、まだ検閲の厳しい時代のことでした。スターリン独裁期の芸術表現は、社会主義リアリズムに基づくものに制限され、黄金期の画家たちが弾圧されていた時代です<sup>4)</sup>。ラチョフはその時代に、創作活動を行った作家なのです。ラチョフが制裁を受けていたとしたら、あの美しい『てぶくろ』の世界は、生まれていなかったかもしれないのです。

今でこそ、絵本の世界で動物たちの擬人化は、子どもたちが感情移入しやすく、至極当然の表現方法として受け入れられています。時代の制約や、常識にとらわれない表現に着手した絵本作家に感謝します。



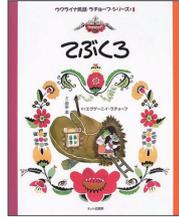
### もうひとつの『てぶくろ』

ラチョフの『てぶくろ』といえば、前ページに掲載した表紙絵のとおり、黄色い絵本を思い浮かべるでしょう。皆さまの歯科医院に所蔵しているという方も多いと思います。1965年に福音館書店より、『おおきなかぶ』と同じ内田莉莎子氏の日本語訳で出版されて以来、ミリオンセラーベスト10常連の人気絵本です。

本国で1950年に出版されているお馴染みの『てぶくろ』と別に、ラチョフがもうひとつの『てぶくろ』を制作していることは、出版文化産業界の外ではあまり知られていません。福音館版『てぶくろ』を出版したのは、ラチョフ44歳の頃なのですが、72歳のときまったくタッチの違う『てぶくろ』をもう一冊、描いたのです。

皆さまに馴染みのある黄色い表紙の『てぶくろ』は、写實的抒情的なとても美しい絵ですが、1978年

『てぶくろ』  
エウゲーニー・M・ラチョフ 絵  
田中 潔 訳  
(ネット武蔵野)



に描かれたものは、可愛らしいタッチで本文背景も明るい色になっています。そして、ラチョフが大事にした民族性が濃くなり、ウクライナの民族衣装がより現実的なのです。最初の『てぶくろ』から28年の経験を重ねた後、ウクライナという国の文化をなお一層、尊重するスタイルが伝わってくるのです。

こちらの『てぶくろ』は、ウクライナ民話集『麦の穂』のために描き直されたものです。動物の擬人化が強くなり、描かれた動物たちはみんな笑っていて、とみに明るい背景は、芸術の弾圧から解放された時代に、自由な気持ちで描かれたようにも受け止められるのです。ラチョフ2冊の『てぶくろ』には、2つの祈りがこめられているようではありません。

## 一方的な攻撃に巻き込まれたいのちを偲ぶ

昔話『おおきなかぶ』がロシアで最初に発表されてからおよそ130年後に、ロシアの画家が一冊の絵本を出版しました。『なぜあんなさうの?』。



『なぜあんなさうの?』  
ニコライ・ポポフ 作・絵  
(BL 出版)



ウクライナの民話『てぶくろ』と同じように、擬人化され服を着たネズミとカエルが登場する文字のない絵本です。文字がないということは、絵だけでストーリーを読む「絵本」です。

作者は、1938年にロシアのサラトフで生まれたニコライ・ポポフ氏で、第二次世界大戦の独ソ戦で争

いに巻き込まれた体験をもちます。幼かった作者が、仲間との楽しい日常の中でわけもわからないまま体験した恐怖や悲劇、そして成長してから読んだ反戦小説などが、戦争や暴力に対する怒りの原点となっていると言います。

『なぜあんなさうの?』のあとがきに、ロシアの画家が記したメッセージを皆さまと共有したいと思います。

私は子どもたちに、戦争が何の意味もないことや、人はくだらないあんなさうの輪のなかにかんたんに巻きこまれてしまうことを知ってほしいと思います、この本をつくりました。本を読んだ子どもたちが、将来平和のために何かできるかもしれません。

そして、子どもたちだけでなく、大人にもあんなさうことのおろかさをもう一度考えてほしいと思います<sup>5)</sup>。

世界の国々は、起源も人種も、文化・環境、言語、絵本の歴史すべてにおいて、異なるさまざまな特徴をもっています。しかしながら、絵本によって自他国の文化を理解し、想像力を豊かにすることで子どもたちの未来の平和を築こうという根底は変わりありません。

砲弾ではなく、花を、絵本をください。



## 文献

- 1) 田中友子：ロシアの絵本，絵本の事典，朝倉書店，東京，p.134-153，2021.
- 2) 田中泰子：「おおきなかぶ」のおはなしー文学教育の視点から（ユーラシア・ブックレット119），東洋書店，東京，p.7-11，2008.
- 3) 田中友子：E. ラチョフ描くふたつの「てぶくろ」をめぐって，カスチョール，(21)，pp.54-71，2004.
- 4) 母の友編集部：ロシア絵本は時代とともに，母の友，(725)，pp.43-46，2013.
- 5) ニコライ・ポポフ：なぜあんなさうの?，BL出版，東京，1995.